

社会的 vs 個人的ワークライフバランス： ワークもライフもバランスも 意識しない生き方

梶島 健治

京都大学大学院医学研究科皮膚科学教授

以前、本誌より本稿の執筆依頼を受けたのですが、わが家には子どもがおらず、子育てのたいへんさが理解できていない私にこの原稿を執筆することがためらわれ、辞退しました。ただ今回は、県立千葉高校の大先輩でもある日本皮膚科学会理事長・藤本 学先生からのご指名なので、お引き受けした次第です。ただ、社会的なワークライフバランスはこれまで多くの方が触れてくださっていますので、「私の個人的なワークとライフ」について語らせていただきます。

親の理解があったこともあり、僕は子どものころから好きなことだけをやらせてもらいました。小説を読み始めたら止まらないので、学校をそのまま休んだり、浪人の1年間は予備校に入らず自由気ままに勉強したりふらっと旅行に行ったり。医学部に入学した後も、バックパッカー、バイト、研究室・雀荘通い、ただ、医学の勉強も面白かったので、海外の教科書の輪読会や USMLE の勉強会などを企画したりしていました。そんなこともあって、同級生に、「自由人・かばちゃん」といわれていました。社会人になってからも、横須賀米海軍病院やワシントン大学で研修生活を大いに満喫し、大学院も基礎研究の教室や留学先も、自分で選ばせていただきました。留学先は一流の研究室でしたが、『ドラゴンクエスト』の新作が発売されたら、終わるまではラボからお休みをいただき、ただ、一方で、打ち込んでいるときは家にも帰らないくらいどっぷり研究漬けという、なんとも身勝手な人生ともいえます。つまりこれまで、何かをやらされている（つまり、ワーク）と感じて生きたことはほとんどありません。

現在私は、大学で臨床・研究・教育を行っています。たしかに次の予定が差し迫っているとのんびり外来はできないですが、臨床はやりがいがあるし、研究は僕の生きる糧のようなものだから趣味以上に幸せだし、後輩の成長を手伝える機会があるのは幸せなことです。



それゆえ、僕にとって、すべてライフであり、ワークと思って人生を過ごしていることはほとんどありません。患者さんを助けることを夢見て医学部に入ったのだから、医師として働けることほどありがたいことはありません。ただ、強いていうなら、形骸化した会議に参加しているときは、ワークと感じているのかもしれませんが、でも、その程度です。

世の中では、社会的ワークバランスが叫ばれていますが、要は、物事の捉え方なのかと思います。臨床業務を仕事と考えるか、やりがいのある素晴らしい時間と考えるのか、それだけで気分は変わってきます。「やらされている」というようなネガティブな気分になると、人生楽しくないですね。

もう1つ。皮膚科は外科・内科・病理など領域が多岐にわたります。自分の好きな領域をみつけ、そこに磨きをかけ、その領域で信頼される存在になれば、またみえる世界も変わるのかな、と思います。そういう意味で、働き方改革っていったい何なのだろうと個人的には思います。最低限の社会的義務（たとえば9～17時の臨床業務など）を果たす必要はありますが、それ以外の時間をどう過ごそうと個人の自由であり、臨床・研究を究めたい人を妨害するようなシステムになるのだとしたら極めて残念なことです。ただ、僕もある程度社会的立場がありますから、不適切な発言は公的な場では控えるようにしていますが、今回は、「自由人・かばちゃん」ということでご寛恕いただければ幸いです。